考古学集刊　第 19 号　43-51 頁，　2023 年

追悼

大塚初重先生を偲ぶ
―明大考古学の先頭を歩み続けた生涯―

石川　日出志

明治大学名誉教授であり、明治大学考古学専攻第三代専攻主任であった大塚初重先生が、昨年 7 月 21 日 21 時 56 分に逝去された。1926（大正 15）年 11 月 22 日生まれ、享年 95 歳。戦後明治大学文科専門部入学第 1 期生であり、かつ 1950 年に設置された考古学専攻の第 1 期卒業生であり、その後、大学院生・教員として明治大学考古学研究室の創設から現在までずっと先頭を歩まれた。明大考古学を育むとともに、日本の古墳時代研究を牽引し、さらには考古学の語り部として全国の方々から愛された。大塚先生は、明治大学在職中から多数の随筆や記録を残しており、退職時に編纂した『思い出文集 やっ、どぉもネ！』（1997 年）[1] に随筆の主だったものを収録した。その後も『君よ知るやわが考古学人生』（2005 年・学生社）、『土の中に日本があった』（2013 年・小学館）、『掘った、考えた』（2016 年・中央公論新社）などで自らの考古学者人生を語っている。また戦争中の苦しみと悔悟などを作家五木寛之氏と語り合った『弱き者の生き方』（2007 年・毎日新聞社）などもある。それらを参照しつつ、ここに大塚先生の足跡を簡潔ながら記し、ご冥福を祈り偲ぶよすがとしたい。

１．明大以前

大塚初重先生は、復員後の 1946 年に明治大学文科専門部地歴科に入学してから考古学に出会い、考古学者としての生涯を歩んだ。しかし、大塚先生の考古学人生を理解するには、明治大学入学以前のことを知る必要がある。1926 年 11 月 22 日、板橋区志村西台町 1670 の父坂田友七・母ふみの次男として生れ、1928 年蔵前の大塚家の養子となる。大塚家は貸席業「植木屋」がなりわいであった。先生は自らを「お調子者で根っからのお人よし、涙もろくて世話好きの性分」[2] というが、嫌なことがあっても顔には出さず、ひそかに心遣いする姿勢は、こうした幼少青年期が土台になったのであろう。

13 歳で地元台東区の育英小学校を卒業すると郁文館商業学校に進学する。普通中学校に進学を望んだものの親御さんに許してもらえず、その悔しさから猛勉強したという。のちにこれが役立つ。1942 年 12 月に繰り上げ卒業し、翌 1 月に海軍水路部の軍属となり、横須賀海兵団を経て 1945 年 3 月に駿河台の YWCA 海軍気象部に勤務する。この時が明治大学との初めての接点ではないか。同月 10 日の東京大空襲による多数の遺体処理作業に従事。忘れ得ぬその日の体験を何度も伺った。4 月に輸送船寿山丸で佐世保港から門司港経由で大陸に向かうも深夜、米軍の魚雷に轟沈される[3]。攻撃を受けた時は船倉内で、燃え盛る炎の中もはやこれまでと思ったが、上からワイヤーが垂れていたので夢中で手繰り、下から足をつかむ手を蹴り落して俺は助かった、と繰り返し悔い語った。一週間後に吉林丸で再び門司港を発つも、またもや轟沈。十日あまりして博多港からようやく釜山港に渡り、軍用列車で上海にたどり着く。上海気象隊で 3 か月を経たのち敗戦となり、復員まで抑留される。そこでの経験もまた生涯の生き方につながる。

２．明治大学で考古学とめぐり合う

1946 年 1 月に上海から佐世保港に上陸し、板橋の実家に復員する。３月から虎ノ門にある商工省特許標準局に雇員として勤務し始めたが、4 月から夜間は明治大学文科専門部地歴科に入学して帰路通うことになる。なぜ大学の地歴科なのかも何度か語っている。東京大空襲直後の凄惨な遺体処理でも、また轟沈されて深夜に朦朧と漂流するなかで「俺が教わった歴史って、何だったんだ。神風なんか吹かなかったじゃないか。」と思った。だから大学で確かな本当の歴史を学ぼうとしたのだと。

写真 1．大塚初重先生（若狭徹氏提供）

年度が押し迫った3月でもまだ志願が間に合うし、勤務経路とも折り合うのが明治大学だった。試験当日朝、地元の下赤塚駅から電車に乗ろうとするもどれも満員で、扉はおろか窓からさえも乗り込めない。そこで屋根によじ登ると、すでに何人もが屋根にへばりついていたという[4)]。

こうして明治大学文科専門部地歴科に入学し、考古学に出会う。明治大学文科専門部は1932年4月に文芸科・史学科（3年制）・新聞科（1年制）が設置され、1938年に史学科が地歴科に改組されていた。1932年に設置された年から科目「考古学」を担当したのが後藤守一氏である。帝室博物館監査官が本務であったが、この一科目「考古学（有職故実・古代文化）」の担当を始めた。1946年4月に明治大学文科専門部助教授、翌年教授になっている[5)]。大塚先生が入学した1946年度は1年生向けに後藤教授が担当する科目「日本古代文化」があった。そのなかで後藤教授が「三種の神器の考古学的検討」を講じており[6)]、これに感銘を受けたという。「三種の神器」とは天皇のレガリア（王権の聖なる象徴物）である。大塚先生は「三種の神器の剣にまつわる後藤先生の講義は…（略）…皇国史観による歴史教育の残滓を多く遺していた私にとっ驚愕の一語につきるものであった」と記す[7)]。これが考古学に触れた最初で、それまで考古学という学問の存在自体を知らなかったという。

二年目の1947年度になると、明治大学文科専門部卒業生で、復員後文部省勤務であった杉原荘介氏が兼任講師として講義を担当し、翌年助教授となる。ここに大塚先生の二人の師が揃い、考古学環境の基本形が定まる。しかし二人の師はまったく思考も学生への対し方が異なった。大塚先生は「二人とも丑年生まれなんだが全く性格が違って、杉原先生が闘牛なら、後藤先生は乳牛だね！」と笑うほどに異なる[8)]。後藤教授（1888.8.10-1965.7.30）は、前掲のように戦前は帝室博物館監査官であったし、『漢式鏡』1926年、『古鏡聚英（上・下）』（1935・44年）、『日本歴史考古学』（1937年）など著作も多い。当時還暦前後で、学生には穏やかに接した。一方、杉原助教授（1913.12.6-1983.9.1）は、戦前越前和紙問屋の家業を継ぎつつ在野の考古学者として頭角を現し、当時30代半ば。戦後もまさしく闘牛のようにふるまった。大塚先生にとっては、後藤教授は正規の指導教授であり、杉原助教授は有無を言わせぬ牽引力の主であった。

３．人生を決めた発掘調査

学生時代に参加したいくつかの調査が大塚先生の生涯を決めた。静岡市登呂遺跡・千葉県能満寺古墳・群馬県岩宿遺跡である。

二年次に受けた後藤教授の講義で、夏に静岡で発掘する話があったことから、教授に頼み込み、「強度の神経衰弱により転地療養を要す」という偽りの診断書を商工省に提出して参加を実現させた[9)]。登呂遺跡の発掘は、後藤教授が申請して採択された科学研究費を発端とする[10)]が、考古学の専攻すらない一大学だけで実現できるものではない。そこで東京圏の大学や文部省・静岡県・静岡市の行政部門、さらに考古学者だけでなく地質学や動・植物学・建築学・民俗学など学際的な大所帯の登呂遺跡調査会という調査体制が組織され、二年目からは新たに創設された全国学会日本考古学協会の特別委員会に引き継がれ、1950年まで毎年夏に実施された。実務を担う幹事の一員であった杉原助教授が強力というよりも強引に牽引した調査で、その中で途中から大塚先生は学生であるにも関わらず書記として経理を担当することになる。実は不本意ながら入学しながらも悔しくて猛勉強した郁文館商業学校で学んだ簿記がここで活きた。発掘調査を行うだけでなく調査食料や畑作物の賠償交渉など多彩な実務を担う。各大学の先生方や学生のなかに信頼が醸成されていったのは想像に難くない。

岩宿遺跡の調査では、登呂遺跡調査四年目の直後に行われた9月の予備調査は参加していないが、10月と翌年4月に行われた第１・２次本調査は参加し、ここでも経理を担当している。その際の出納帳博物館に残されており、日々の収支が克明に記される[11)]。毎日「焼酎4合5本」と記され、遺跡近くの国瑞寺の境内に焼酎瓶で囲った花壇ができたという伝説の裏付けとなっている。のちに私が専任助手になった大学入試の採点業務の折、かつては大塚先生が算盤で集計するのがつねだったという言い伝えもあった。

能満寺古墳の調査は文科専門部2年目の1947年である。登呂遺跡の初年度の調査を終えて二か月あまりのちの11月に10日間かけて行われた。周辺の農家を回って食料の買い出しをしながらというご苦労しながらの調査であった。全長73.5ｍの前方後円墳で、木炭槨の主体部に銅鏃・鉄鏃・鉄斧・鉄刀・鉄剣・銅鏡片などの副葬品を確認し、主体部上から古相の土師器を伴う状況を確認した。その2年後、新制大学制度により発足した文学部の日本史学専攻3年生の秋、杉原助教授に勧められて執筆した調査報告が『考古学集刊』第3冊で活字になる[12)]。先生にとっては初めての古墳発掘調査であり報告である。しかし発掘経験わずか3年目で、現在でも関東では屈指の前期前方後円墳の調査報告を執筆した経験は、のち1952年に行った常陸丸山古墳の調査とともに先生のライフワークを古墳時代研究に導く契機となった。先生も「古墳研究の道を歩いてきた私の第一歩」と記す[13)]。しかし、この報告論文を準備するに際して、後藤教授も杉原助教授も遺物の実測図作成に関して何ら具体的な指導もなかったために、両先生が著した論文類を参照して独力で行うしかなかった。特に土器は古墳の時期判

断を行う上で最も重要な基準であるにもかかわらず、のち振り返ってきわめて不本意な実測図になったことを悔いていた。そのためであろう、『君よ知るやわが考古学人生』で、古墳時代研究のきっかけとなったこの古墳の調査と報告を記した際の挿図では、土器の実測図を省いている[14]。この経験がきっかけとなって遺物実測については学生をきつく指導するようになった。

退職記念の『思い出文集 やっ、どぉもネ！』には大塚先生の履歴・業績とともに遺跡調査歴も掲載してある。それをみると、いまではとても考えられないほどの発掘調査を行っている。例えば、専任講師となった翌1958年をみると、東京都多摩川台古墳群、静岡県三池平古墳、福岡県城ノ越貝塚、千葉県加曽利貝塚、東京都三宅島ボウタ遺跡・利島大石山遺跡、石川県高木森古墳、広島県中山貝塚、東京都丸山1号墳、千葉県正徳院近世墓地、島根県多聞院貝塚などの調査、埼玉県皆野大塚古墳の測量調査とある。じつに関東から九州までの七都県12遺跡に上る。一年中全国を飛び回って発掘していたと何度も述懐されていたが、今の感覚であればいつ授業をしていたのか不思議に思うほどである。戦後20年間の調査遺跡を見ると、後藤・杉原両教授の調査がそれぞれ五～三割、大塚先生担当の調査が一・二割といった比率である。これは発掘調査の場で問題を整理して解く杉原方式であり、調査後に発掘資料・データを整理検討する方式は大塚先生に始まるといってよかろう。

４．すべてが第一期生

大塚先生の歩みを振り返ると、すべてが第一期生だという点も重要である。

まず学生時代。前記のように1946年度に明治大学文科専門部地歴科に入学。文科専門部は、1944年度は学内問題、44年度から45年度は空襲激化により授業はままならぬ状態であったから、敗戦後の1946年度はようやく平静な状態に戻った最初の年度である。文科専門部は3年制であるから1948年度で卒業となる。ところがちょうど1949年度に新制大学制度により文科専門部が廃止され、新たに文学部が創設された。この頃すでに杉原助教授の先導により考古学研究室を名乗っていたものの、新設された文学部史学地理学科には考古学専攻はなかった。文科専門部時代に考古学に関する科目はあったものの主要構成部門と位置付けられていなかったために、日本史学・東洋史学・西洋史学・地理学専攻のみによるスタートとなった。しかも旧制度では、「小学校6年→中学校5年→高等学校／予科／専門部３年」であったために、1946年度に文化専門部に入学して3年で卒業生しても、新制大学の3年生に編入するしかない。そのたため、大塚先生は日本史学専攻3年生に編入となる。ようやく一年遅れの1950年度から考古学専攻が開設されたので、その4年生に転専攻し、1951年に晴れて文学部史学地理学科考古学専攻を卒業する。大塚先生24歳。もちろん史学地理学科の4専攻とも同じで、1951年3月に新制大学制度による第1期卒業生が誕生した。

ちなみに、1950年度の史学地理学科第1期の5専攻の4年生は、自分たちの研究発表の場が欲しいとして学生会費を元手に教員を説得して『駿台史学』を創刊し（1951年3月）、その秋に駿台史学会を立ち上げた。大塚先生もこれを主導した一員である。学部学生が自らの予算をもとに教員を説得して学会を立ち上げた稀有な事例である。

大塚先生は1951年3月に卒業すると、ひと月の間を置いて5月に文学部助手となる。この年に後藤教授に従って長野市（当時埴科郡寺尾村）大室古墳群の発掘調査に携わる。のち1983年に杉原教授が亡くなった後、自ら考古学研究室を主導して学生教育を行う拠点をして大室古墳群を開始するのは、この時の経験が糸口になっている。

翌1952年になると大学院文学研究科に修士課程が創設され、その第1期生として進学。この時は助手を併任できたが、1954年になって博士課程が開設され進学すると、今度は助手を併任できなくなり生活が困窮する。小学校5年生の時から兄妹のように暮らしてきて、大学院に進学した年に結婚した奥様の収入と、時折は大学院同期の芹沢長介氏のご尊父銈介氏の染色工芸にかかる内職をし、助手時代に買った『考古学雑誌』を売るなどしてかろうじて生計を立てたという。

博士課程３年在学・中退して、1957年度から文学部専任講師に就任。30歳。4年後の1961年度に助教授、その2年後に「前方後方墳序説」で文学博士（明大文1号）を取得した[15]。すべて戦後明治大学の第1期生である。

なお、博士学位申請については杉原教授に強く勧められ、ねじり鉢巻きで数か月かけて書き上げたという。これには事情がある。杉原教授は1943年9月に文科専門部を首席で卒業したものの、大学院経験はない。そのため博士学位は取得していなかった。ただし、新制大学制度のもとで課程博士を輩出すれば、そのあとであれば論文博士を申請することができる。それが歴然と分かるのは、杉原教授は大塚先生の翌年に「日本農耕文化の生成」で博士学位を取得した。興味深いことに、東洋史学の青山公亮、日本史学の遠藤元男両教授も同年学位を取得している。

５．古墳時代研究者としての歩み

古墳時代研究者という面に話を進めよう。学生時代に能満寺古墳の発掘調査に参加してその報告も活字化したことがきっかけとなって、古墳時代研究に焦点を当てるようになる。そして卒業論文題目は「日本古代葬制の一

考察―特に箱式石棺の系統分布を中心として―」、修士論文は「舟形石棺の研究」いずれも後藤教授の助言と指導による。修士 2 年の秋、京都大学人文科学研究所で開催された日本考古学協会で、前年行った茨城県柿岡丸山古墳の調査成果をもとに「常陸丸山古墳の墳形と内部構造について」、さらに翌 1954 年 10 月、同所開催の同学会で修士論文にさらに資料調査を行って研究発表「舟形石棺に関する二、三の問題」を行う。ところが事前に発表要旨を読んだ後藤教授から、自説の舟葬論を織り込んで発表しなければと困ると言われ、急遽修正して口頭発表した。その部分に対して会場から人類学の金関丈生、東北大学の伊東信雄、國學院大學の大場磐雄といった学界の大先生が次々に質問し、さらに、のちに奈良大学の学長になるが当時まだ学生だった水野正好氏までもが批判し、立ち往生状態となった。京都大学の梅原末治教授が「大塚さんは後藤さんの説を代弁してるんだから、後藤さん応えなさいよ」と発言するも、後藤教授は応じなかった。口惜しい思いで研究発表を終えると、内容には批判的であるはずの京都大学の小林行雄先生が祇園の顔なじみの店に案内して、杉原先生ともども慰めて下さり、さらに小林邸に泊めてもらい、悔し泣きしながら夜を明かした[16]。

1952 年秋に調査した常陸丸山古墳が茨城県で最初に確認された前方後方墳であったことから、前方後方墳の研究に邁進することになる。島根大学の山本清先生の論文から山陰にも前方後方墳にも前方後方墳があると知り、さらに現地調査すると京都大学梅原末治が前方後円墳とした奈良県新山古墳も前方後方墳であることを確認する。その成果を自ら創設した『駿台史学』の第 6 号（1956 年）に「前方後方墳の成立とその性格」と題して発表する。さらに掘り下げて 1963 年に学位請求論文「前方後方墳序説」で文学博士（明大文 1 号）を取得したことは先述した通りである。

学生時代の登呂遺跡で東京圏の各大学の先生方と学生、院生時代の日本考古学協会弥生式土器総合研究特別委員会による西日本各地の遺跡調査で全国の考古学者と知り合うが、しかしまだ古墳時代に関しては東日本の研究者と言ってよかった。しかし次第に全国区の古墳時代研究者と評価されるようになる。直接の糸口は、1959 年、小林行雄先生が編集する『世界考古学大系』Ⅲ（古墳時代）で「大和政権の形成―武器武具の発達―」の執筆を担当したことにある。戦後まもなく古墳時代研究の体系を構築した小林先生からの勧めは、光栄であると同時に大変な重責と感じたに違いない。小林先生には、後藤・杉原両教授のもとで苦労する大塚先生を励ます意図もあったのかもしれない。その期待に応え、厳しい論調で知られるようになる野上丈助氏が『論集武具』（1991 年・学生社）でこの論文を評価したほど確かな内容にまとめ上げる。

さらに 1966 年には、日本考古学界の先後 20 年間の研究成果をまとめ上げた出版として、今も高く評価される『日本の考古学』シリーズのⅣ（古墳時代・上：近藤義郎・藤沢長治編）で、「古墳の変遷」を担当する。これは前掲の『世界考古学大系』Ⅲで小林先生が担当した古墳編年の基準を示したものと同名の論文である。これを纏めるために、学会の折に全国各地を分担する考古学者に集まってもらって意見交換を重ねたという。小林説を基盤としながらも、古墳の変遷観の詳細を提示し、まさしく全国区の古墳・古墳時代研究者と目されるようになった。

６．よろこびと葛藤

『日本の考古学』Ⅳ掲載論文が公になってまもなく、在外研究の機会を得る。明治大学では、サバティカル（長期研究休暇）制度のひとつとして在外研究があり、1967 年 6 月から翌年 1 月まで欧米を歴訪する。後藤教授も若い頃にヨーロッパ留学し、杉原教授も戦後、短期的に欧米への研究出張を重ねていた。杉原先生からは、欧米の考古学者の名前を列挙して、直接会いに行けと言われて閉口したようである。ハワイのビショップ博物館の篠遠喜彦氏を訪ねるのを皮切りに、アメリカ合衆国・英国・エジプト・イランなどを歴訪した。特に大英博物館では W．ガウランドの大阪府芝山古墳資料を調査するなどたくさんの収穫があった。

帰国後まもなく教授に昇格するが、翌年大学の副学生部長となる。大学紛争の真っただ中で、しかも学内に警察が入って学生を不当逮捕したことから学生部長名で警視庁を訴えているので、いざという時に神田警察署に派遣要請できないという理由（？）から、学生部長ではなく大塚副学生部長が学生対応の最前線に立たされる。しかも、考古学専攻でも市川市史編纂事業の一環として行われた同市須和田遺跡の発掘調査を考古学実習に組み込んだことなどが問題となり、火種となっていた[17]。連日学生と対応し、時には小川町校舎 2 階にあった考古学陳列館から座っている椅子ごと専攻学生に担ぎ出され、群集の中で糾弾されたこともあったと訊く。ちなみに必修科目「考古学実習」はこれがきっかけで実施できなくなって科目は廃止され、約 20 年後の 1987 年に大塚先生が先導してようやく復活した。

しかし、こうした葛藤の前後に、次々に魅力的な遺跡の調査に巡り合うよろこびもあった。その筆頭は、1965 ～ 68 年の勝田市（当時）の馬渡埴輪製作遺跡であろう。古墳ではない谷地から中学生が埴輪を採集したことをきっかけに調査をすると、谷の傾斜地に窯跡が並び、その背後の平坦地で粘土採掘坑や竪穴建物の工房群が発見された。埴輪を製作する場が面的に一体として把握できたことは、学界に大きな刺戟を与えた。

また、次いで勝田市史編纂事業として行った虎塚古墳

の 1973 年の調査では、横穴式石室から未盗掘の彩色壁画を検出した。東日本の前方後円墳では初の彩色壁画である。前年に奈良県高松塚古墳の石室から極彩色の壁画が発見されたが、盗掘を受けていた。古墳壁画の保存対策を考えるには未盗掘石室内の環境データが必須なので、その条件に適う古墳の調査があればすぐ連絡が欲しいと、東京文化財研究所の新井英夫氏から依頼されていた。そのため即座に応援を乞い、温・湿度や空気組成等のデータが採取され、それを基準としてその後の保存環境が保たれるようになった。

それ以外でも、群馬県教育委員会の調査に協力した高崎市綿貫観音山古墳の 1968 年の調査では、荘厳な大陸系文物が多数発見された。運も実力のうちというべきであろうか。

しかし、私が大塚先生の考古学でもっとも注目するのは土器研究である。杉原教授から、土器を知らねば古墳時代であれ社会など分からないと強調されたのが大きいであろう。私が挙げたいのは、1963 年の「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」(『考古学集刊』2-1) と 1965 年の「福井市林遺跡の調査」(『考古学集刊』3-2) である。前者は、知井宮遺跡の層位と型式学で山陰の弥生時代中期～古墳時代前期の土器編年を、後者は地点と型式学で北陸の弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年を構築した。いずれも 1970 年代に資料の蓄積に伴って詳細な議論が進む際の基盤となった。土器研究の師であるはずの杉原教授の土器研究をはるかに超える精度の分析を行ったと考える。

7．考古学と古墳時代研究の語り部

大塚先生は、50 歳前後から語り部としての活躍が増し、定年退職後はそれが生きがいともなった。きっかけは二つあるように思う。

『思い出文集 やっ、どぉもネ！』の巻末の業績一覧に学外講演の論題と年月日が列挙されている。それをみると、1972 年以前は 1958・1960・1961 年に各 1 回であったのが、同年 5 月から講演が突如急増したことがわかる。この年の 3 月 21 日に奈良県明日香村にある高松塚古墳で発見された極彩色の壁画が華々しく報道されて、全国が古代史ブームに沸いたのである。1972 年 5 月から一年間の講演 9 回のうち 5 回が高松塚古墳関連で、しかも翌年 8 月に大塚先生自ら調査した勝田市虎塚古墳で壁画が発見される。その後 1 年間の講演 8 回のうち虎塚古墳を取り上げたものが 7 回に及ぶ。それから 91 歳になるまで関東圏にとどまらず全国を飛び回り、明治大学定年退職の前年である 1996 年の講演はなんと 29 回にも及ぶ。虎塚古墳の装飾壁画発見が、調査者である大塚先生ご自身に大きな影響を与えた。

もう一つの契機は、1983 年 9 月 1 日に杉原教授が現役 69 歳で亡くなったあと、考古学陳列館の館長を引き継いだことである。考古学陳列館は、1950 年に考古学専攻が創設されたのを受けて、学生が実物の考古学資料を日常的に触れる環境を整えようと、杉原先生が戦前から収集した資料を大学に運び込んで 1952 年に開設した。その際に、京都大学の文学部陳列館をモデルとし、名称のみならず調査時の図面類などを収納する箱形ファイルも京都大学から譲り受けてこれを模倣した。明治大学の学芸員養成課程は戦後長らく考古学専攻教員が担当していたが、美術分野をも含めた幅広い視野の専門家養成が必要だとして、サントリー美術館・山種美術館・北海道立近代美術館の設立準備の実績のある倉田公裕氏を 1978 年度に教授として招聘し、独立した部門に改めた。すでに博物館学界の重鎮であるこの倉田教授が「もはや陳列館の時代ではない」と主張しても、杉原教授はまったく受け入れなかった。これを大塚先生が考古学博物館に改称した。

それだけでなく、博物館としての実質を備える必要があると考えて．市川市で考古博物館や歴史博物館などを 30 代で創設して活躍した熊野正也氏を学芸員として採用する。この熊野学芸員が「いままでのような上から目線の大学博物館ではダメで、社会人の誰もが参画して楽しめる博物館でなければならない」と提案した。これを大塚館長が全面採用して「明治大学博物館友の会」が生まれ、その会員の要望として「考古学ゼミナール」が始まった。毎年春と秋にそれぞれ 5 回連続で公開講座を催し、しばらくは申込み者が多すぎてお断りするのが常態という盛況であった。大塚先生が所長を務める人文科学研究所 [18] でも公開講座を始めるなど、学内に飛び火し、それらが統合されて現在のリバティ・アカデミーという社会人向け講座組織となった。明治大学は 70 歳定年で、大塚先生がこうして始まった社会人向け公開講座だが、大塚先生は定年退職後 [19] は、リバティ・アカデミーの連続講座で話すのが生きがいとなる。受講生はいつも満員で、ずっとアカデミーの「稼ぎ頭」であった。しかも通常は 90 分なのに、大塚先生は「90 分では思いの丈を話せない」と、異例の 2 時間であった。しかも立ったまま講義する。それどころか、常連さんたちが「大塚組」を自称して、講座終了後もお茶を共にして話し込むのがつねであった。

これは誰もが「大塚節」と呼ぶ絶妙な語り口ゆえのことである。私は何度か大塚先生の講演録をテープ起こししたことがある。しかし文章にしてみると面白さがなかなか分からなくなってしまう。本で読む落語と生の寄席との違いと同じ。大塚先生の場合は、同じ話を何度聞いたとしても面白い。「芸」というほかない。

大塚先生は実は、敗戦時に上海に抑留されていた時に演芸大会があり、友人からの誘いで漫才を特訓したのだ

写真 2. リバティアカデミー最終回の様子（リバティアカデミー事務局提供）

という。コンビ名は＜上海ガーデンブリッジ＞。復員直後にも一度伊東温泉に呼び出されて舞台に上がったという[20]。語りの絶妙な抑揚と間合い。時にはきわどい話もチラリとまぜる。ここでも、意外な経験をのちに活かしていく力が見える。

８．大塚先生の日常

大塚先生の口ぐせは「やっ、どぉもネ！」。現在、駿河台キャンパスのリバティタワーの東南側はす向かいにある紫紺館（校友会館）の 2 階に考古学陳列館があり、そこが考古学研究室でもあった。朝、出勤すると、軽やかに右手を上げてにこやかに「やっ、どぉもネ！」。1997 年に定年退職されるのを記念して思い出文集を作成した。考古学博物館の会議室で専任教員と博物館学芸員が集まり、さて書名をどうするかと会議をもった。黒沢浩学芸員が半ば笑いながら「『やっ、どぉもネ！』なんて面白いんじゃないでしょうか」と提案。ところが戸沢充則主任教授が「よし、それだ！」と即決。そして 5 月 31 日に行われた退職記念会で贈呈したとき、いくらか憮然とした表情とみたのは私だけだろうか。

学内では授業担当以外に、副学生部長（1969.4-1971.3）、硬式庭球部部長（1971.4-1992.3）、文学部教務主任（1973.12-1976.11）、文学部史学地理学科長（1978.10-1980.9）、考古学専攻主任（1979.4 -1988.9・1990.10-1996.3）、明治大学評議員（1980.2-1984.3）、人文科学研究所長（1983.4 - 1988.3）、考古学博物館館長（1983.10 - 1992.3）、文学部長（1988.10-1990.9）、明治大学理事（1992.4 - 1996.3）とほぼ間断なく学内の役職に就いた。庭球部の部長はお気に入りで、考古学専攻には毎年のように硬式庭球部の体育推薦入学者がおり、その活躍を愉しんでいた。部員全員を成田の自邸に招いて焼肉パーティーを開き、帰りは貸切バスで八幡山の合宿所まで送り届けたこともある。もちろんすべて大塚先生もち。

大学職員からの信望も際立つ。戦後明治大学のつねに一期生であったことだけでなく、学内外での活躍、教員と職員の別を感じさせない気遣いがつねであったからであろう、大学職員からは抜群の人気があった。定年退職して 10 数年経ってもなお、うるさ型の年長職員が集まると大塚先生がたびたび話題となっていた。

1983 年 9 月に杉原教授が亡くなったあとの 10 月 15 日、考古学専攻生を集めた夏期調査報告会の終盤大塚先生は「明治大学と杉原荘介」と題する身に講演を行った。その翌年から自分が学生の教育を先導する意気込みで、かつて助手として後藤教授を補佐した長野市大室古墳群の継続的調査に着手した。全国を飛び回るゆえ調査期間中常駐することは叶わなかったが、必ずしばらく滞在して小林三郎教授とともに調査の指揮を執った。この調査の折に水彩スケッチを始め、大室古墳群を何枚も描き残している。

ちょうどその頃、同志社大学が論集考古学シリーズを開始した（1982 年～）。大塚先生はこれに刺戟されて、明治大学も毎年学術誌を出そうと一念発起して、京都に赴いた。小林行雄先生を訪ね、明大で考古学の雑誌を出したい、ついては戦前に小林先生が活躍の場とし、運営にも尽力した東京考古学会の名を使いたいと了承を求めたのである。小林先生は了解したものの、『考古学』という雑誌名は森本六爾先生のものゆえ使っては困ると話したという。ところが大学に戻って、さあ出す準備を始めようと提案すると、戸沢充則教授が「その前に発表するべき内容を組み上げるところから始めないといけない」と主張して、実現しなかった。現在のこの『考古学

集刊』はそれから20年あまり後の2004年度に、文学部の希望した専攻の雑誌刊行費を1回だけ補助することになったのを機に復刊したものである。

さて、大室古墳群など合宿調査する旅館にお見えになると、当然夜の調査ミーティングのあとは、大塚先生を中心に杯を片手に語り合うことになる。数々の調査や杉原先生の思い出などが語られる。そして消灯時間には解散となるが、就寝前の歯磨きで洗面所で顔を合わせると「もうちょっとだけ？！」。ここからが長い。やがて先生の十八番（おはこ）が始まる。＜惚れたって駄目よ＞。これは1961年に 和田弘とマヒナスターズが歌った曲の替え歌で、歌詞二番の「惚れたってだめヨ どうせ学生だもの 卒業したなら 惚れておくれよ・・・」をもじって大学の出世話にしたものである。「惚れたって駄目よ、まだ学生だもの、卒業するまで待っててくれ、い～ついつまでも、待ってね、待ってね～」で始まり、院生、助手、講師、助教授、教授、学部長、学長、理事長、総長、と延々と続き、手拍子しながらも皆が飽き飽きした頃「・・・女房が死ぬまで待っててくれ、い～ついつまでも、待ってね、待ってね～」で全員がひっくり返って、やっとおしまいになる。

思えば大塚先生の歌は何度聴いたことか。調査合宿、史学地理学科教員で関東近県で一泊する慰労会、一時ほとんど毎週通った上野黒門町のクラブ風スナック「子爵」、李進熙先生が案内する韓国史跡見学旅行などなど。＜あこがれのハワイ航路＞、＜東京ラプソディー＞、＜東京の花売り娘＞、＜目ン無い千鳥＞、＜夜来香（イェライシャン）＞、韓国に出かけるようになってからの＜サランヘヨ（愛しています）＞などなど。その優しい歌声はじつに味があり、今も蘇る。

定年最後の3年間担任となったクラスの教え子のひとりである榊（雄城）しおりさんへのハガキを紹介してこの追悼文をおしまいにしよう。榊さんは卒業後すぐ博物館嘱託となり、そのあとの就職先を探して悩んでおり大塚先生に相談したところ、数日後次の文面のハガキが届いた。

人生って　寂しいときも　楽しいときもありますよ
がんばれ雄城君　　大塚

その春、中国・新疆を旅した際のスケッチの一枚をハガキに描き、水彩を施してある。

大塚先生は、古墳研究など学界でも、大学の教育と運営にも、獅子奮迅の活躍をされた。そこにはつねに笑いと温かみがあった。若い頃、九死に一生を得るなど、数々の苦しみを体験し、それを自らの力に変え、それを教育や人々との心の交流に活かした。そうした大塚先生に教えを受けたことを、いま、とても嬉しく思う。

きびしく学問するのはもちろん、つねに穏やかな笑いと喜びを感じること、それが明大考古学の学問と教育の伝統だと思う。大塚先生が育んだものを、これからも継承していきたい。

注

1) 大塚初重先生頌寿記念会（編）1997『思い出文集 やっ、どぉもネ！』東京堂出版製作（「第二部随随筆」選定は石川が担当）
2) 大塚初重 1995「私の故郷―性分は蔵前仕込み―」『朝日新聞』10月4日（注1文献 pp.171-172）
3) 大塚初重 1991「轟沈された船からの生還」『朝日グラフ』12月25日号（注1文献 pp.174-176）、大塚初重 2013「第1章 米潜水艦に撃沈される」『土の中に日本があった』小学館 pp.13-62
4) 注3前掲書（大塚 2013）「1. 念願かなって明治大学へ」pp.63-75
5) 明治大学文学部50年史編纂委員会 1984『明治大学文学部五十年史』明治大学文学部
6) 『あんとろぽす』創刊号「特輯日本古代史への反省」の筆頭に掲載（pp.2-13）された同名論文の内容を講じたものであろう。後藤 1947『日本古代史の考古学的検討』山岡書

写真3. 榊（雄城）しおりさんへのハガキ（同氏提供）

店 pp.103-165 に訂正再録。

7）大塚 1996「敗戦から考古学への道へ」『歴史家が語る戦後史と私』吉川弘文館（注 1 文献 pp.205-208）

8）杉原氏は丑年だが、後藤氏は一年違いの子年生まれ。

9）注 3 前掲書（大塚 2013）「2. 登呂遺跡と私の青春」pp.75-102

10）杉原氏の証言によると、この調査は杉原氏が企画し、文部省の科研費担当官として後藤教授に促して申請したという。明治大学文学部五十年史編纂準備委員会 1981『地歴科から史学地理学科へ―考古学専攻創設のころ―』明治大学文学部 50 年史資料叢書Ⅸ

11）注 1 前掲書 p.209

12）大塚 1949「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』第 3 冊 pp.22-32

13）注 3 前掲書（大塚 2013）「1. 考古学人生最初の古墳調査」pp.129-136

14）同書 p.49

15・16）大塚 2005「第 4 章 舟葬論から学位審査まで」『君よ知るやわが考古学人生』学生社、pp.65-84

17）紛争時に学生団体が作成した孔版刷の記録集『須和田だより』がある。

18）これも杉原教授が京都大学人文科学研究所をモデルとして明治大学に設置したもので、初代所長となった。

19）明治大学は 70 歳で専任教員は定年となる。しかし 75 歳まで兼任講師を務めることができる制度であったのを現在のように 70 歳に短縮する、その移行期に当たったために大塚先生は満 72 歳を迎えた 1998 年度まで兼任講師として大学院で授業を担当した。

20）注 3 前掲書（大塚 2013）「2. 若き苦闘の日々」pp.203-226

主な編著書

『常陸丸山古墳』（後藤守一共著）、山岡書店、1957 年 11 月
『考古学の調査法』（中川成夫・桜井清彦・小出義治共編著）、古今書院、1958 年 2 月
『考古学ノート 原史時代Ⅱ』（吉田章一郎共編著）、日本評論社、1958 年 3 月
『能登高木森古墳』（後藤守一・橋本澄夫共著）、石川県七尾市文化財保護協会、1960 年 9 月
『三昧塚古墳』（後藤守一・斎藤忠共著）、吉川弘文館、1960 年 9 月
『三池平古墳』（後藤守一・内藤晃共著）、静岡県庵原村教育委員会、1961 年 6 月
『日本原始美術３（弥生式土器）』（杉原荘介共著）、講談社、1964 年 9 月
『日本原始美術４（青銅器）』（杉原荘介共著）、講談社、1964 年 11 月
『信濃 長原古墳群』（小林三郎共著）、長野市教育委員会
『シンポジウム古墳時代の考古学』（森浩一等共著）、学生社、1970 年 6 月
『土師式土器集成Ⅰ』（杉原荘介共編著）、東京堂出版、1971 年 12 月
『土師式土器集成Ⅱ』（杉原荘介共編著）、東京堂出版、1972 年 9 月
『シンポジウム弥生時代の考古学』（小田富士雄等共著）、学生社、1973 年 5 月
『土師式土器集成Ⅲ』（杉原荘介共編著）、東京堂出版、1973 年 10 月
『土師式土器集成Ⅳ』（杉原荘介共編著）、東京堂出版、1974 年 9 月
『日本古代史の謎』（藤間生大・水野祐ほか共著）、朝日新聞社、1975 年 3 月
『茨城県馬渡における埴輪製作跡』明治大学文学部研究報告６（小林三郎共著）、1976 年 3 月
『考古学ゼミナール』（江上波夫等共著）、山川出版社、1976 年 3 月
『日本古代史の謎』（小林三郎共著）、学習研究社、1977 年 5 月
『虎塚壁画古墳』（小林三郎ほか共著）、勝田市、1978 年 3 月
『日本考古学を学ぶ１』（佐原真・戸沢充則共編）、有斐閣、1978 年 11 月
『考古学の謎解き』（乙益重隆・門脇禎二ほか共著）、講談社、1979 年 4 月
『日本考古学を学ぶ２』（佐原真・戸沢充則共編）、有斐閣、1979 年 7 月
『日本考古学を学ぶ３』（佐原真・戸沢充則共編）、有斐閣、1979 年 8 月
『成田市史 原始古代編』（編著）、成田市、1980 年 3 月
『国家成立の謎』（森浩一・西嶋定生ほか共著）、平凡社、1980 年 4 月
『稲荷山古墳とさきたま古墳群』（斎藤忠共著）、三一書房、1981 年 7 月
『探訪日本の古墳 東日本編』（編著）、有斐閣、1981 年 11 月
『古墳辞典』（小林三郎共編著）、東京堂出版、1982 年 12 月
『考古学者・杉原荘介―人と学問―』（編集代表）、杉原荘介先生を偲ぶ会、1984 年 12 月
『埴輪』考古学ライブラリー 37、ニュー・サイエンス社、1985 年 7 月
『登呂遺跡と弥生文化―いま問い直す倭人の世界―』登呂遺跡発見 40 周年記念シンポジウム、（森浩一共編）、1985 年 7 月
『日本考古学選集 18 後藤守一（下）』（編著）、築地書館、1986 年 4 月
『東国の古墳文化』、六興出版、1986 年 6 月
『日本古墳第辞典』（小林三郎・熊野正也共編著）、東京堂出版、1989 年 9 月
『図説 西日本古墳総覧』（編著）、新人物往来社、1991 年 1 月
『季刊考古学別冊３ 東国の古墳』（編著）、雄山閣出版、1992 年 11 月
『日本古代遺跡事典』（桜井清彦・鈴木公雄共編著）、吉川弘文館、1995 年 3 月
『図説 成田の歴史』（編著）、成田市、1995 年 4 月
『必携古代史ハンドブック』（吉村武彦共編著）
『最新 日本考古学事典』（戸沢充則共編）、柏書房、1996 年 6 月

『弥生時代の考古学』（石野博信等共著）、学生社、1998 年 9 月
『続日本古墳大辞典』（小林三郎共編著）、東京堂出版、2002 年 9 月
『巨大古墳を造る―倭王の誕生―』史話日本の古代 4、（編著）、作品社、2003 年 2 月
『大塚初重のレクチャー 「弥生時代」の時間』、学生社、2003 年 10 月
『大塚初重のレクチャー 「古墳時代」の時間』、学生社、2004 年 2 月
『君よ知るやわが考古学人生』学生社、2005 年 11 月
『考古学から見た日本人』青春新書 INTELLIGENCE、青春出版社、2007 年 1 月
『弱き者の生き方』（五木寛之共著）、毎日新聞社、2007 年 6 月（徳間文庫、2009 年 7 月）
『「考古学」最新講義 古墳と被葬者の謎にせまる』、祥伝社、2012 年 9 月
『古代天皇陵の謎を追う』、新日本出版社、2015 年 5 月
『邪馬台国をとらえなおす』講談社現代新書、2012 年 4 月（『読み直す日本史 邪馬台国をとらえなおす』、吉川弘文館、2021 年 8 月）
『土の中に日本があった―登呂遺跡から始まった発掘人生―』小学館、2013 年 5 月
『「考古学」最新講義シリーズ 装飾古墳の世界を探る』、祥伝社、2014 年 2 月
『歴史を塗り替えた日本列島発掘史』、KADOKAWA・地中経出版、2014 年 12 月
『古代天皇陵の謎を追う』、新日本出版社、2015 年 5 月 30 日
『掘った、考えた』、中央公論社、2016 年 10 月
『90 歳のスケッチ―考古学と人生―』、百年書房、2017 年 4 月
『考古学者大塚初重 スケッチ画集』、百年書房、2021 年 1 月